

【講演会】

現代アメリカの文学作品と仏教

田 中 泰 賢

今日は講演会にご出席くださりましてありがとうございます。一年生の皆さん愛知学院大学ご入学おめでとうございます。縁がありまして愛知学院大学に入学されましたことは皆さんの努力によるものですけれども、同時にご家族の協力のお陰もあります。感謝の気持ちを忘れずに励みましよう。

四月から「教養セミナー」という授業も受けておりますね。その教養セミナーの前身は総合科目Ⅴ「学問の発見」という授業でした。当時の小出忠孝学長は次のように述べています。「数年来我が国の教育改革について検討を行つた臨時教育審議会に於いても、大学に於ける一般教育課程のあり方は、重要テーマとして検討されました。その結

果、昨年発足した大学審議会でも、この問題が最重要課題の一つとして最初にとりあげられており、その成果が期待されています。本学でもこの様な現状から、如何に学生に勉学に対する意欲、興味を持たせるかについて、教養部の先生方の研究の結果、その一つの方策として、総合科目Ⅴ「学問の発見」を開講することになったのであります。この科目は大学の新生入生に対して学問とは如何なるものか、如何に学ぶべきか、如何に学生生活を送るべきか等を考え、論議し、教授されるセミナー形式の授業であります。この「学問の発見」を履修することにより、学生諸君に真に学問する喜びを見出し、真の知識を身につけ、社会に出て役に立つ人間になってほしいと期待しているのであります。

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

す。『学問の散歩道』第一号、愛知学院大学教養部、一九八八年、「巻頭言」

当時全国的に教養部改革が行われており愛知学院も一九八〇年代の後半から一九九〇年代、「新しい学問の発見」という教養セミナー形式の授業を発足しました。その成果の一つとして、学生にわかりやすい一般教育誌『学問の散歩道』が毎年発行されました。『学問の散歩道』の第五号（一九九二年）の「編集後記」に「学生諸君には、教養部で勉強する間に是非とも「散歩」をするだけの気持ちのゆとりをもって欲しいものだと思います。このゆとりが様々な発展に繋がるのです」と書かれています。次の第六号（一九九三年）の「編集後記」に「教養部教育の改革のため会議また会議のあわたたしい一年が終わろうとしていく」と記されています。教養部内の会議、教養部と各学部間の会議の連続でした。そういった中で教養部の先生方も教育・研究に真剣に取り組んでいたことが伺えます。

この『学問の散歩道』は第一号（一九八八年四月）の発行から第九号（一九九六年三月）まで続きますが「学問の発見」の授業題目が「教養セミナー」に変更されるに伴い

『知の旅立ち 教養セミナー学生論集』の第一号が一九九七年に発足しました。二〇一九年の三月には第二十三号が発行されています。『学問の散歩道』は主に先生方が執筆していましたが、『知の旅立ち 教養セミナー学生論集』は完全に学生のエッセイによって構成されています。『学問の散歩道』第四号（一九九一年）に小尻浩さん（当時商学科四年、山岳部）は「有意義な自由を―新入生へ―先輩よりのメッセージ」と題するエッセイを書いています。その中で彼は「さまざまな体験の場で肌の合わない人、目上の人、お年寄り、障害を持った人、外国人と誠意を持ってコミュニケーションをはかるすべを身につけるべきだと思う。それは社会に出てから、もつと役立つはず。また社会に存在するさまざまな矛盾や不公平に対して目を向ける行為が、社会を一步前進させると思う」と綴っています。

石井孝治さん（当時経営学部一年）は「自然科学の学問の発見」と題するエッセイで「今、僕は権田武彦先生の開講されている教養セミナーを受講しています。権田先生は結晶、特に雪、氷などの氷の結晶を専門に研究しておられる方です。受講しようとしたきっかけは、前々から結晶と

いうものに興味を持っていたからですが、その内容はとても興味深く、一年間とても楽しく受講させていただきました。雪、氷の、自分にとつての未知の形態や性質、その世界の奥深さの一部を見、聞き、学び、僕はとても貴重な体験をしました」と書いています。(『知の旅立ち 教養セミナー 学生論集』第一号、一九九七年)

長谷部昭美さん(当時心身科学部心理学科一年)は飛天(天女)が仏教の歴史と深いかわりがあることを学び、それをエッセイ「飛天の歴史」の中でまとめられています。

「西北インドにおいて仏像が作られるようになった二世紀頃のクシャン朝期ごろより、仏の周りで花綱を手を携え、豊満な姿で飛翔する飛天を見ることができ。略。中国の飛天が日本に渡来するのは、仏教の伝来と同じように飛鳥時代のことであった。その後の日本における飛天は平安、室町時代を経て日本独自のスタイルに変貌をとげていくのである。そして仏教建築はもとより、説話や謡曲、舞踊などに表現されるに至っている。遠くインド、西域を経て日本に至った飛天の歩んだ道をふり返ることで、先人達の築いた文明、文化のすばらしさを充分実感することができ

た」。(『知の旅立ち 教養セミナー 学生論集』第八号、二〇〇四年)

野田千恵さん(当時宗教学科一年)はドイツの作品『ヒルベルという子がいた』と日本の作品『さっちゃんのみまほうのて』を比較して「ヒルベルとさっちゃん―障害者に対する作者のアプローチの仕方の違い―」というエッセイにまとめています。その後半部分を引用します。『さっちゃんのみまほうのて』と比べて、『ヒルベルという子がいた』には起承転結がまるでない。ただ淡々と、ヒルベルがこの日どうした、このときどうした、と語るのみである。そしてラストではヒルベルのその後に関しては一切書かれていない。その後を知らなければすっきりしないし、気になつて仕方がない、と言うのが正直な私(野田千恵)の意見だ。だが、ここがこの二つの絵本の違いであるかもしれない。『ヒルベルという子がいた』では、ヒルベルがその後どうなったかということを読者に委ねているのだ。ヒルベルのその後を考えるとともに、「障害者に関することも考えてほしい」と作者は考えたのだろう。一方『さっちゃんのみまほうのて』は、あくまでも障害者に対する接し方を子

どもに教えようとしている。「障害を持つ子からといって差別をしてはいけない。障害を持つ子とも仲良く遊ぼう」と。『ヒルベルという子がいた』は、障害を持つ子にスポットを当て、その子の日常を描き、感情移入をさせた後、主人公ヒルベルのその後とともに、「障害者に関して考える」ことを読者に訴えている。日本の作品では読者に対して教えを説き、ドイツの作品では読者に対して読者自身が考えることを要求する。これはこの二つの本の大きな違いであるといえるだろう」。（『知の旅立ち 教養セミナー 学生論集』第九号、二〇〇五年）

以上、ごく一部文ですが『学問の散歩道』と『知の旅立ち』から学生のエッセイを紹介しました。

今日の出席者は商学部、経済学部専攻の新入生が多いようですので先輩の活動の一端を紹介します。「東京商工リサーチ名古屋支店が二〇一六年九月八日にまとめた、愛知県内に本社を置く企業の社長の出身大学ランキングによると、最も社長を輩出しているのは愛知学院大学です。一位愛知学院大学一七七〇人、二位名城大学一二九〇人、三位愛知大学九三九人、四位名古屋大学八三九人、五位日本大

学七二七人、六位慶応義塾大学七〇九人、七位南山大学五一四人、八位愛知工業大学四九七人、九位早稲田大学四九〇人、一〇位名古屋学院大学四六四人」となっています。皆さんは卒業後、特にビジネス界に入ると思いますので先輩の努力の一端を紹介しました。

アップル社の創業者スティーブ・ジョブズさん（一九五五—二〇一一）も皆さんと同じ若い頃、非常に模索していたようでありまして、アメリカのカリフォルニア州の禅心寺などで熱心に坐禅を続けていたということは皆さんもご存じでしょう。スティーブ・ジョブズは「仏教には『初心』という言葉があるそうです。初心を持つということは、素晴らしいことです」と語っています。鈴木俊隆老師（一九〇五—一九七二）をはじめとする多くの有縁の方々の協力によって一九六七年に建立された禅心寺（タサハラ禅マウンテン・センター）はアメリカで初めての本格的な禅の集団による修行道場（僧伽）として今日に至っております。鈴木俊隆老師は次のように述べております。

「集まって、坐禅を行うのは、仏教にとっても、また私たちにとっても、最も大事なことです。この修行が本来の

生活の仕方だからです。ものごとの始まりを知らない、人生での努力の結果に感謝することができません。私たちの努力は、なんらかの意味を持つてはるはずで、努力の意味を知るには、努力の源を見つけなければなりません。初源を知らないで、努力の結果だけについて関心を払うべきではありません。略。私たちが、本来の性質を取り戻し、そこを基礎にして、絶え間のない努力を続ければ、一瞬一瞬、一日一日、毎年毎年、その結果に感謝するでしょう。このようにして、私たちは人生に感謝します。努力の結果だけに執着していると、それに感謝する機会は巡ってきません^③。ジョブズは坐禅のみならず、尊敬していた鈴木俊隆老師の著書を通して人生のあり方を学んでいったであります。

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

フィリップ・ホーラン (Philip Whalen, 1923-2002)
というアメリカ人がおりました。この人はアメリカの詩人であり、曹洞宗のお坊さんでもありました。彼は本格的にお寺の住職としてアメリカ人を指導したという非常に希少な詩人でした。そのホーランという詩人が「禪心寺」という題名の詩を書いておりますので、紹介します。

「禪心寺」

私たちの人生は名状しがたい歲月 全くのボタンの掛け
違い

でもイエイツ氏は、鐘の音やシマントロンの音
の方へ動くことをすぐく望んだ

慣習と礼儀

鮮やかな素晴らしい色のまとまり |アーサー・ラッカム
の世界

(汚れなく、保護もなく、悪口もない)

あらゆるものが煮沸され、きれいになり、またはドライ
クリーニン

ごしごし洗い、磨いてピカピカにする人たちがおそろく
住んでいる

彼らはサンフランシスコの乳製品のトラックを運転する

芸術は硬い岩の平面の割れ目からにじみ出る

外の大望と内心の暴虐

「カラマーゾフ万歳！」

あらゆるしがらみから解き放たれて

全くすごい人がひよっこり現れた

私はコーヒーカップを手にして散策する

温かい春雨の中 精進する学生たちと雑談しながら

一九七四年三月二五日（訳と傍線は田中⁽⁴⁾）

「禅心寺」という詩の中に三名の人が登場します。一人はウイリアム・バトラー・イェイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) というアイルランドの詩人です。次の人は英国の挿絵画家アーサー・ラツカム (Arthur Rackham, 1867-1939)、そして三人目が『カラマーゾフの兄弟』等を書いたロシアの作家フョードル・ドストエフスキー（一八二一

一八八一）です。ただドストエフスキーという名前は直接この詩には登場していません。しかし全く異色な詩です。これをご覧になった皆さんが自由に解釈していただければ、それでよろしいかと思えます。この「禅心寺」という題名の詩はイェイツ、アーサー・ラツカム、ドストエフスキーという人物を取り上げて私たちに問題を提起しているような、そういう詩ではないかと思えます。禅の言葉で言えば公案とも言えるでしょう。

この詩の作者、ホエーランは先ほど申しましたようにアメリカ人です。詩の中に登場する一人、イェイツはアイルランド人です。風呂本武敏氏は「自己の本性を求める熱意において、アイルランドとアメリカは双璧だと考えたことがある。しかしそれは必ずしも同じ意味においてではない。アメリカは本生の内実を顕現させることに熱心であるのに比して、アイルランドは見失ったものの再発見、いや、むしろ再確認に熱心であるといった方がより適切であろう⁽⁵⁾」と述べています。風呂本氏の比較は興味深いものです。アメリカ人のホエーランは曹洞宗の僧侶になり、修行を続けて詩も書き続けました。確かに本生を求めることに

精進しています。またイエイツの願いは「民族・人種・個人達は、それらにとつて可能なもののうちでも最も達成困難な精神状態を象徴するか喚起するような、或る一つのイメージ、もしくは関連したイメージ群によつて結合される」^⑥ことでありまして、見失つたものへの再確認に熱いものが感じられます。

上の詩の一行目に「私たちの人生は名状しがたい歲月」と書かれています。「アイルランドの完全独立という夢は、実は、イエイツ自身も見続けてきた夢であつた。だから、ぼくはイエイツの思いを想像しながら追いかけていくことができる——ぼくらが夢を見ていけないということがあるだろうか。人間はたしかに愚かな存在である。だが、その愚かな人間が突如として、遠く離れた所に夢を見ようとするのがこの世の中には起こりうるのだ。誰にそれを責めることができるだろう」^⑦と羽矢謙一氏は語っています。ホエーランもイエイツに做つて夢を追いかけていつたと思う。

イエイツが一九二三年にノーベル文学賞を受賞したことはよく知られています。亡くなる前の年の一九三八年に、

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

「彫像」(The Statues) という題名の詩を残しており、その「彫像」の第三連の最後の二行は次のように表現されています。

銅鑼（ゴング）とほら貝（コンチ）が祝福の時間を宣するとき、

老いたる雌猫（グリマルキン）が仏陀の空へ這つて行くとき、^⑧

先ほど取り上げました「禅心寺」という詩からホエーランはイエイツの詩を読んでいたことがわかります。この「禅心寺」という作品はイエイツの「彫像」という作品に焦点をあてたのではないかと思ひまして「彫像」から二行取り上げました。

「禅心寺」の傍線の部分、「イエイツ氏は、鐘の音やシマントロンの音の方へ動くことをすごく望んだ」という表現はイエイツの「彫像」の「銅鑼とほら貝が祝福の時間を宣するとき、老いたる雌猫が仏陀の空へ這つて行く」という表現と重なります。イエイツの「彫像」の中の「這つて行く」という表現は、ホエーランの「禅心寺」の詩の「動く

こと」に、またイエイツの「彫像」では「銅鑼とほら貝」と表現をしていますけれども、ホエーランの「禅心寺」では「鐘の音やシマントロンの音」という表現になっています。

内藤史朗氏という有名なイエイツの研究者がおられます。多数の論文を書いています。内藤氏は「彫像」にあてた禅の影響」（一九六九年）および『彫像』の試作過程における禅の影響」（一九七一年）という論文において、鈴木大拙が坂東性純に送った手紙、鈴木大拙がイエイツに送った書物『禅仏教と日本文化への影響』や、イエイツが明らかに影響を受けた鈴木大拙の著書『禅仏教のエッセイ』を紹介し、さらにこの詩の定稿に至るまでの種々の草稿を調べて、「仏陀の空」について詳しく論じております。ですから「彫像」についての貴重な資料であります。グリマルキンというのは雌猫でありますけれども、これは非常に古風な表現だそうです。内藤氏は、「その雌猫「グリマルキン」を自我や意思（ウイル）とすれば、「仏陀の空」は対照的自我（アンティ・セルフ）や仮面（マスク）であると結論づけるに至った。したがって「仏陀の空」は決して軽蔑的に考えてはならない」と述べています。さら

に内藤氏は同論文で次のように発表しています。

鈴木大拙博士が生前、弟子の一人坂東性純氏に宛てた手紙の一部で、『彫像』の「仏陀の空」は鈴木博士自身の影響であることを認めておられることが判明した。イエイツが鈴木大拙の著書や論文を読んでいたことは、石橋裕女史の指摘されるとおりである。鈴木博士のこの手紙は、単にイエイツを研究する日本人にとって興味あるものであるのみならず、イエイツにおける禅の意味を、世界のイエイツを愛する人たちに誤解のないように知らせるためにも、ぜひ公表しなければならないものであると考える¹⁰。

鈴木大拙という人は、アメリカに仏教を伝えた有名な方でありました。そして五十年後に鈴木俊隆がアメリカに仏教を伝えます。禅心寺を建立した鈴木俊隆のお弟子からホエーランは法を受けます。鈴木大拙の禅の影響を受けているであろうイエイツの作品「彫像」に注目したホエーランは「禅心寺」という作品を書いていったと思われれます。そ

うしますと、この「禪心寺という詩は鈴木大拙と鈴木俊隆の二人への思いの心がまじりあったものとも考えられます。

イエイツの詩「仏陀の空へ這って行く」の原文は“crawls to Buddha's emptiness”という表現です。“crawl”というのは「這う」という意味です。仏教では仏法僧に敬意を表す礼拝（らいはい）があります。合掌して頭を下げる礼拝から、膝をつく礼拝、そして五体を大地に投げ出す礼拝まで数種あります。イエイツが用いている“crawls to”「這う」という表現は、仏教において一番丁寧な礼拝、五体投地の礼拝を思い起こさせます。それは両肘、両膝、頭の五か所を大地につけるものです。さらにはその投げ出した両手のひらで、仏の足を自分の頭に頂戴する。上座仏教や禅宗では、座具という布製の敷物を畳んで左腕に掛けて持ち歩きまして、これを広げて床に敷き、その上で五体投地をします。

私事になりますが、一九七九年にインドの仏跡参拝の旅に参加したことがあります。その時にチベットの方々と思われる巡礼の人たちが、全身を投げ出して這うように進

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

む、また五体投地をする、這うように進む、その繰り返しで巡礼の旅をしている様子に感動したことを思い出します。そのイエイツの詩にある「這う」“crawls to”は、まるで五体投地の拝をも連想させる巧みな表現だと思いました。

先ほどのイエイツの詩に「銅鑼とほら貝」という楽器が登場しています。東儀道子氏は著書『雅楽の心性・精神性と理想的音空間』の資料一から資料七までにおいて、仏教經典における音楽を詳しく調べて、発表しています。資料四では『法華経』に見る音楽」が取り上げられておりまして、その中に銅鑼とほら貝も見られます。例えば「如来は偉大な教えの雨を降らせ、偉大な教えの太鼓を打ち鳴らし、偉大な教えのほら貝を吹き鳴らし、また偉大な教えの鑪鉦を叩こうとしていられるのだ。如来は偉大な教えを説こうと願っておられるのだ。また、そのとき、最勝・最高の「ざとり」を得た仏たちに供養する手段として、銅鑼・ほら貝・小鼓などの、音色の好い楽器を奏させた人々も、また太鼓を打ち鳴らさせた人々も、略、かれらはすべて『ざとり』に到達するであろう」^①。

『佛教大事典』によれば、「銅鑼」というのは主に、禅宗の寺院で法会の際に用いる楽器です。近世では茶会の合図用にも使われました。普通、鑄造したものに鍛造を加えて音響をよくし、形は浅い丸盆状。紐を付けてつるし、大鑼は架に掛け、小鑼は手に持ち、槌で打ち鳴らします。また、ほら貝は古来、仏事の楽器として用いられました。山伏の法具の一つで、山林修行や法会の際に吹く貝。ほら貝を吹くことは転凡入聖（凡夫の状態を転じて聖者の境地に入る）などを意味するとされております¹²⁾。以上の資料や『佛教大事典』から仏教において銅鑼や法螺貝もまた大切な楽器であることが分かります。

つまり、イエイツが取り上げている銅鑼やほら貝は、仏教においても仏事の楽器として用いられた楽器であることになりました。ですから銅鑼もほら貝も仏陀の空に結びついてきます。そうであればイエイツはよく調べていたことになりました。ホエーランの詩では「鐘の音やシマントロンの音」(“the call of bell and semanton”¹³⁾)と表現されています。このシマントロンは禅寺で使用される木版の音に似ています。だからホエーランはこのシマントロンという表

現で自ら修行したお寺、禅心寺の木版の音をイメージしようとしたと思われます。このシマントロンというのは主にロシアなどの東方正教会で使われるそうである、それはカトリックでもなくプロテスタントでもない。シマントロンは東方正教会の象徴でありましょう。内藤史朗氏はイエイツの鈴木大拙、野口米次郎をはじめとする東洋の人たちのみならず、ウインダム・ルイス、ウォルター・ペイター、ウィリアム・モリス、アーサー・ウェイリー、バルザック達の西洋の人たちの図書の読書歴を詳しく調べております¹⁴⁾。したがって、イエイツの心にはさまざまに思い、東西の文人、思想、宗教等が入り交じっていたでありましょう。ホエーランはイエイツのカトリックでもなく、プロテスタントでもない、もっと広くて大きいものを表すためにシマントロンを表現したとも考えられます。もう一つ考えられるのは上の詩の後半のドストエフスキーの作品『カラマーゾフの兄弟』の一節「カラマーゾフ万歳」に繋がったとも考えられます。

ホエーランは進行形“wanted so much to be moving”¹⁵⁾を用いています。この推移動詞の進行形は、その推移

が終了する直前の状態を表し、「まさにくをしかけてい
る」という意味になります。ホエーランはイエイツの状態
を進行形の“move”で表現したと思います。ホエーランが
尊敬していた鈴木俊隆老師は「心が落ち着いていて一定で
あれば、たとえ騒がしい世界の真ん中に入れても、静
かで安定していることができます。本当に落ち着いた静か
な心を見つけるには、長い時間がかかります。ときに男性
は女性に対して礼をします。ときに師は弟子に対して礼を
し、弟子は師に対して礼をします。弟子に対して礼をしな
い師は、ブツダに対してでもできません。ときに弟子と師
は、ともにブツダに礼をします。ときに私たちは、犬や猫
にも礼をするのです」と述べています。イエイツ氏の心境
もきつとそうであつたでしょう。

ですからホエーランの詩の上から四行目の「習慣と礼
儀」は大切になってきます。イエイツの詩「私の娘への願
い事」(“A Prayer for My Daughter”)に「第一に、礼儀
を身につけさせた」(“In courtesy I'd have her chiefly
learned”)と書かれています。ホエーランはこの詩も好き
だつたでしょう。「イエイツはあくまで穏健な国民主義者

現代アメリカの文学作品と仏教(田中)

の立場をとっていた」ように、過激な行動を取るよりは穏
健な、穏やかな心を保つほうへ進みました。

風呂本武敏氏は、イエイツの生まれたアイルランドにつ
いて次のように述べています。

「最近、私はアイルランドが世界に向けて重要なメッ
セージの発信基地として、かけがえのない役割を果たして
いるのに気づき始めた。この国の世界平和に向けての取り
組みの運動に私たちは大きな感銘を受けてきた。つい最近
も核不拡散条約再検討会議でも、アイルランドの代表ポー
ル・ガヴァナは基調演説を行っている。また、今年故人に
なったノーベル平和賞のショーン・マクブライドも、世界
の指導的な平和活動家としてよく知られていた。

このようにアイルランドの世界平和のメッセージは、重
要度が高いのはこの国、特に北アイルランドが一九六九年
に紛争を再燃させてからでも、和平討議再開までの二十数
年の長期にわたる内戦に、多大な犠牲を払ってきた理由に
よる」⁽¹⁸⁾。そのようなアイルランドの詩人、イエイツをホ
エーランは尊敬していました。

アーサー・ラッカムという人はイギリス生まれの挿絵画

家でした。平松洋氏によれば、「ラッカムから影響を強く受けたといわれている一人に、あのウォルト・ディズニーの小人』をはじめいくつかの作品に、ラッカムが描いた小さな老人や妖精たちの姿があるというのだ」¹⁹。ホエーランはアメリカ人ですから、ウォルト・ディズニーの作品に親しみを持つていたでしょう。自ずとアーサー・ラッカムに行きつきます。「ラッカムは生まれつき病弱だったようで、一八八三年、十六歳の時に大病を患っている。医者の勧めもあつてか、静養を兼ねてオーストラリアへ旅行に出ている。半年間の旅行で、見違えるほど元気になり、画家になる決心も固めたようだ。帰国した彼は、堅実にもラムベス美術学校の夜間クラスを受講しながら定収入を得るための職に就くことを選択する。昼はウエストミンスター火災保険会社に勤めながら、夜は美術学校に通う生活が始まる」²⁰。ラッカムは働きながら夜間の学校で勉強している。ホエーランの詩に「ごしごし洗い、磨いてピカピカする人たちがおそらく住んでいる。彼らはサンフランシスコの乳製品のトラックを運転する」とありますが、おそらく

ラッカムが働きながら美術学校の夜間クラスで学ぶことを意識して、右のような詩を書いたと思われる。またホエーラン自身が禅寺で重要視される作務、すなわち掃除、料理、風呂焚き、お寺の修理等を実際に行っていることも意識しながら、重ね合わせた表現ではないかと思えます。

「第一次世界大戦を経ると、物価高騰により豪華本であつたこれらの挿絵本は、急速に衰退していく。これではいけないと一念発起したのか、一九二七年、六十歳を超えたラッカムが活路を見いだしたのが挿絵新興国であるアメリカだった。ニューヨークでの個展は大成功を収め、ニューヨーク市立図書館からも特注本として、『真夏の夜の夢』の製作依頼が来たのである」²¹。ラッカムがアメリカで個展を開くことによつてアメリカに彼の作品が知られていった。ホエーランも、そういったところからラッカムに親しんだのではないかと思われます。

ラッカムの作品は、日本の十九世紀初期の版面に強く影響を受けた北ヨーロッパの北欧ゲルマン様式と融合したものとされています。高橋吉文氏は「アーサー・ラッカムも、ジャポニスムのもたらした装飾性とデザインの自在さ

に力量を發揮した挿絵画家である。その「シンデレラ」(一九〇九年)は、細密に描かれたリアリズムのように見えながら、ヒロインが幽閉されている部屋の枠組みは、黒を基調とした日本的装飾、部屋の床板や、斜めや横に走る太い梁にびつしりと描きこまれた装飾的図像、極端な遠近法、襪褌のようであるが実はファッション・プレートのように美しい装飾性を醸し出すシンデレラの衣装と、それと酷似した壁紙によるその反復の持続、そして絵の枠の上の黒い鼠たち、枠下に描かれた姉たちの黒いシルエツトなど、装飾性とデザイン性が主導していて、これまたジャポニスムの圈内にはつきりとあるものであることがわかる⁽²²⁾と述べています。さらに高橋氏はラツカムの「ヘンゼルとグレーテル」についても「浮世絵十八番の斜めの強いラインが画面中央を屋根として太く走る」と説明しています。ホエーランは上の詩で「芸術は硬い岩の割れ目からにじみ出る」と表現していますが、ラツカムも影響を受けている日本の版画は絵師、彫師、摺師そして版元、和紙を作る人たち、版木の板を作る人たちの共同作業によって出来上がっています。つまり絵師の絵が彫師によって硬い板に彫ら

れ、摺師によって和紙に絵がにじみ出てくるように浮かび上がってきます。日本の美術の影響を受けたラツカムがアメリカのデイズニーに影響を与えています。そのラツカムをアメリカの禅詩人、ホエーランが取り上げています。循環しているようです。

村上春樹氏は、彼がこれまでの人生で巡り合った中で最も重要な本の一冊に、ロシアの作家ドストエフスキーの作品、『カラマーゾフの兄弟』を挙げています⁽²⁴⁾。上の詩に「カラマーゾフ万歳!」という言葉があります。これは『カラマーゾフの兄弟』の終わりの場面に二度出てきます。この作品の主人公とも言われておりますアリオシャというカラマーゾフ兄弟の一人を尊敬していた少年が亡くなります。その少年の友達が皆でお葬式に行くわけですが、お葬式に行った後、アリオシャが少年たちに語りかけます。

語りかけた後、少年たちがアリオシャに向かって「僕たちあなたが好きです、僕たちあなたが好きです」と一同はくりかえした。その眼には涙が輝いていた。「カラマーゾフ万歳!」とコーリヤは歓喜に堪えぬように叫んだ。

略。「一生手を取り合っていていきましよう！ カラマーズフ万歳！」、もう一度コーリヤが感激したように叫ぶと、ほかの少年たちは、もう一度その叫びに和した。⁽²⁵⁾この詩の「カラマーズフ万歳！」というのは、その箇所ではないかと思えます。

アリョーシヤはお葬式が終わった後、少年たちに言いました。「楽しい日の思い出ほど、殊に子どもの時分親の膝元で暮らした日の思い出ほど、その後の一生涯にとつて尊く力強い、健全有益なものはありません。諸君は教育ということについて、いろいろ喧しい話を聞くでしょう。けれども子どものときから保存されている、こうした美しく神聖な思い出こそ、何よりも一等よい教育なのであります。

過去においてそういう追憶をたくさん集めた者は、一生救われるのです。もしそういうものが私たちの心に一つでも残っておれば、その思い出はいつか私たちを救うでしょう。もしかしたら私たちは悪人になるかもしれない。悪行を退けることができないかもしれない。人間の涙を笑うような人になるかもしれません。略。無論そんなことはあつてはならないが、もし私たちがそんな悪人になつたと

しても、こうしてイリユーシヤを葬ったことや、臨終の前を彼を愛したことや、いまこの石の傍らでお互いに親しく語り合つたことを思い出したら、もし仮に、私たちが残酷で皮肉な人間になつたとしても、いまこの瞬間に私たちが善良であつたということを、内心嘲笑するような勇氣はないでしょう！ それどころか、この一つの追憶が私たちを大なる悪から護ってくれるでしょう。⁽²⁶⁾

『カラマーズフの兄弟』の終わりの場面は次のように進みます。「イリユーシヤの法事に行きましよう。そして心配しないで薄餅（プリン）を食べましよう。昔から仕きたりの旧（ふる）い習慣ですからね、そこに美しいところがあるんですよ」アリョーシヤは笑つた。

「さあ、行きましよう！ これから私たちはお互い手を取り合つて行くんですよ。⁽²⁷⁾それはホエーランの詩の最後の箇所「学生たちと雑談しながら」と重なつてきます。小林銀河氏は論文の中で次のように述べています。

ロシア正教の信仰の立場から、ドストエフスキーを読んでいる現代ロシアの多くの研究者たちは、キリスト教と

しての一神教の立場に厳密にこだわっていることが見て取れる。『中心』とはすなわち、創造者たる神、人間の罪を自分の血であがなうキリストなどが占めている、キリスト教のいわば『核』の部分と考えればよいだろう。そこに対するロシア人研究者たちのこだわりを、我々日本人は留意しなければならぬ。それに対して、中村健之介氏の汎神論的な解釈の背後からは、日本文化における多神教的、あるいは自然信仰的な土壌、『草木国土悉皆成仏』という有名なテーゼに表れている日本的仏教思想が見えてくるように思われる。キリスト教文化の中で暮らすロシア人の立場から、日本人の『間違い』を指摘することは容易かも知れないが、間違いだと指摘するだけでなく、その『間違い』(それも彼らの目から見た場合の『間違い』)がなぜ起こるのか。『間違い』の背景にどのような世界観が横たわっているのかを追究することによってこそ、異なる文化間の相互理解にとって生産的な議論が可能になるのではないだろうか。⁽²⁸⁾

この小林氏の説明は示唆に富んだものであります。ホ

現代アメリカの文学作品と仏教(田中)

エーランの「禅心寺」という詩を私たちは見てきたわけですが、このホエーランは「禅心寺」と題する詩でなく、アイルランドの詩人エイツ、英国の挿絵画家ラッカム、ロシアの作家ドストエフスキーを取り上げたのでしょうか。きつとホエーランはもつと広い心があったからこそ、さまざまな国の詩人、画家、作家を取り上げたと思います。先ほどの詩に「これから手を取り合って行くんですよ」と表現されるようにもつと世界の人々と協調していくことをホエーランは願っているように思われる。次もホエーランの詩です。

「偏った扱い」

夜明け前の明るい月光

一つの大団円、あまりにも劇的な庭

荒涼とした、不思議な感触

H・P・ラヴクラフトはお気に入り形容詞…

「恐ろしい」を常用した

母ちゃんが「鳥のくちばし」と呼んでいた

「アメリカサクラソウ」の花がホグバックの墓地の周囲で花盛り

鈴木（俊隆）老師の偉大な、よどみのない記念碑（モニュメント）

野生のシクラメンが本当にギリシア詩歌集の中にあるように

私は帰宅して絡子（らくす）を山吹色の糸で直す

タサハラ、一九七八年二月二四日²⁹

（拙訳）

この詩は「私は帰宅して絡子（らくす）を山吹色の糸で直す」で終わっています。僧侶にとって大切な法衣の一つ、絡子を繕っています。これも修行の一環であることを表しています。その行の下に一九七八年二月二四日、タサハラと明記されています。タサハラは禅マウンテン・センター、すなわち禅心寺のことです。ここでホエーランが修行していました。

この詩で二人の人物が登場します。一人はホエーランが修行している禅心寺を創建した鈴木俊隆老師です。もう一

人はアメリカの怪奇小説家H・P・ラヴクラフトです。詩の中に「鈴木俊隆老師の偉大な、よどみのない記念碑」という表現があります。ヒューストン・スミス氏（マサチューセッツ工科大学 哲学教授）は「鈴木俊隆老師が打ち立てた記念碑は、西欧における最初の曹洞禅の僧伽（サング）であるタサハラの禅マウンテン・センター、その支部であるサンフランシスコの禅センター、そして一般の人々にとってはこの本『禅マインド ビギナーズ・マインド』である³⁰」と述べています。ホエーランにもタサハラの禅心寺、サンフランシスコの禅センター、および鈴木俊隆老師の著書が記念碑として大きな影響を与えていることがわかります。

古木宏明氏は「H・P・ラヴクラフトは存命中、低俗三文文士と呼ばれても、エドガー・アラン・ポーと同等か、あるいはポーを上回る怪奇文学作家と評価されたのは、彼の愛好者や仲間内だけであった。当時、アメリカにおいてバルブ雑誌（低俗雑誌のこと）というものは識者からは見向きもされない代物であった。そこに掲載されていたラヴクラフトの作品も同様に、読む前から評価することを放棄

されていたとしても無理からぬことであつた。恐らくは、それが主な理由で彼の作品が、当時、評価を受けることが少なかったのだと思われる⁽³¹⁾と述べています。古木氏はさらに「ラヴクラフトの作品は今や、英米において数百万部を売り、十数か国語に翻訳され、その名は一つの文化現象（宮壁定雄一九八四・二〇四）になっている。それはラヴクラフトの高弟と呼ばれたオーガスト・ダーレスの功績がなければ、ラヴクラフトの現在の評価はあり得なかつた⁽³²⁾」と論じています。紀田順一郎氏も「過去四十年間のラヴクラフト評価の流れの中でもっとも特徴的なのは、（大衆現象としてのラヴクラフト）の出現である⁽³³⁾」と書いています。

いまから六十年前、仏教をほとんど知らない国に鈴木俊隆老師は出かけました。老師のもとに参禅に来た若者たちがいました。彼らはヒッピーと言われて揶揄されたビート世代の若者たちです。必ずしも認知されていないアメリカの若者たちと接する鈴木老師に、冷やかかなまなざしを向けたアメリカ人もいたでしょう。鈴木老師に対して最初は偏見もあつたであろうアメリカ人に、仏教を伝えることは生やさしいことではなかつたと思います。そういう状況で

老師を支えたのは、老師のパートナーである夫人、および弟子たちでした。ラヴクラフトを支えたダーレスのように、「偏った扱い」を書いたアメリカの詩人ホエーランは、青年のときビートの世代でありました。彼も禅心寺等でビートとして禅の修行をしていましたから、鈴木俊隆老師が受けた偏った扱いの苦勞を直接的に、また間接的に知っていました。この詩の題名「偏った扱い」には、そのような思いがあつたのではないでしょうか。詩の中ではあからさまにそのようなことは書いておりませんが、鈴木俊隆老師を簡潔に称えているだけであります。そこがこのホエーランの良さであると私は思います。

上の詩「偏った扱い」の一行目は「夜明け前の明るい月光」と表現されています。H・P・ラヴクラフトは「無名都市」(“The Nameless City”)という作品の中で「月影のもと、涸れ果てた恐ろしい谷間を旅していた私は、出来損ないの墓所から屍体の一部が突き出してもしたかのよう⁽³⁴⁾に、そこが怪しくも砂上に突き出しているのを、遙か遠くに目にしたのだった」という箇所があります。その中の「月影」は、上の詩の「月光」を彷彿とさせます。また

「恐ろしい」という表現は上の詩の四行目「恐ろしい」と対応しますし、「墓所」は上の詩の後半の「墓地」と重なります。このラヴクラフトの「無名都市」には「恐怖の皺」「ぞっとするような沈黙」「寒々とした月の光」(一三頁)、「夜と月」「冷風が新たな恐怖」「月が煌々と輝き」(一四頁)、「恐ろしい夢」「人食い鬼の如く」(一五頁)、「ある種の祭壇や石がひどく恐ろしく」「月の投げかける長い影」(一六頁)、「月が鮮やかな輝きを放ち」「再び恐怖を抱かせた」(一七頁)、「超自然的な嘆息」「月にちらりと目を向けてみれば」「理屈を超えた恐怖を覚えていたが」(一八頁)、「恐ろしい幻想の中」(一九頁)、「月の霊葉」(二〇頁)、「ぞっとするほど棺桶に似たものだった」(二二頁)、「恐ろしい様子」(この廊下(ホール)は、略、きわめて荘厳かつエキゾチックな技巧の建造物(モニュメント)」(二二頁)、「恐ろしい降下」(二四頁)、「月光」(二五頁)、「月光に照らされる遺跡」(二六頁)、「恐ろしい意味合い」「あの恐ろしい降下」「新たな恐怖」(二七頁)、「恐怖を追い払った」「不気味な光」「肉体的な恐怖」(二八頁)、「寒々とした月」「恐ろしげに反響する」「私の恐怖」(二九頁)、

「新たな恐怖」「恐ろしさに身震いしながら」(三〇頁)、「古代種族の墓の中で」(三一頁)、「悪霊(グール) 食人の魔物」「大地の腸」「闇の中」(三二頁) のように月、恐怖、墓、超自然といった言葉及びそれに類した表現が多くみられます。これは上のホエーランの詩に顕れる言葉、「月」「超自然な」「恐ろしい」「墓地」「モニュメント」と対応します。

金井公平氏は論文「西洋文学における超自然―H・P・ラヴクラフトとゴシック小説」⁽³⁵⁾を書いていきます。H・P・ラヴクラフトを高く評価しています。この論文で金井氏は上田秋成の『雨月物語』巻之三「吉備津の釜」も取り上げて論じているのは見事です。『雨月物語』「吉備津の釜」では、夫の正太郎に裏切られ怨霊と化して死んだ妻の磯良が、正太郎の命を狙っております。正太郎は恐ろしくなつて祈禱師に祈つてもらい助けを乞うわけです。怨霊が世を去ったのは七日前だからあと四十二日、合計四十九日の間、固く戸を閉めて、お守り札を全て戸口に貼り付けて、神仏に祈りなさいと言いわたされました。しかし、残念なことには戸を開けるのが早かったわけです。早すぎたために

吉備津の釜の終わりには次のように書かれています。「月あかりで見ると、軒の端に何か引っかかっている。灯火を高く差し上げて照らして見ると、男の髪のもとどりだけが引っかかかって、ほかにはなにひとつない。浅ましくもまたおそろしいことは、とうてい紙筆につくすことができないほどであった」³⁶。見えるはずの死体が見えないのは非常に奇妙です。

同じ『雨月物語』の中に「青頭巾」という作品があります。「青頭巾」では「食人鬼が住むお寺に旅の僧が一夜の宿を借りた。その旅の僧は静かに座り続けた。夜が更けると月夜になった。月光は玲瓏として、堂の中を隈なく照らし出した。ちようと真夜中と思われる頃である。食人鬼が出てきてばたばたと辺りを探し始めた。しかし見つからないらしい」³⁷。これも奇妙です。旅の僧はお堂に座っているのですが、食人鬼には旅の僧の姿が見えない。見えるはずの僧が見えない。「翌朝、食人鬼は旅の僧に懺悔する。旅の僧は中国、唐の僧、永嘉大師『証道歌』の一節「江月照松風吹、永夜清宵何所為」を食人鬼に与えて、その真意を探究するように教えた。一年後、東北からの帰り、再びそ

の旅の僧はお寺に立ち寄った。あの食人鬼は『証道歌』の一節を唱えていた。旅の僧が一喝すると、水が溶けるように食人鬼の姿が消え失せてしまった」³⁸。これも不思議なことです。この話の結末は「曹洞宗のありがたいお寺をおひらきになったのである。このお寺は、太平山大中寺として、いまなお尊く栄えているということである」³⁹と書かれています。H・P・ラヴクラフトのものと、この『雨月物語』も、どちらも恐怖物語ということで共通するものがあるかと思えます。

ホエーランの詩「偏った扱い」に登場するH・P・ラヴクラフトと鈴木俊隆老師とはどのような意味合いがあるのでしょうか。H・P・ラヴクラフトは当時の偏った見方によつて作品があまり評価されませんでした。しかし、金井公平氏が「ラヴクラフトは恐怖が人間ののもっとも深いところに潜む、もつとも強い感情であると強調している。不振を続ける文学ジャンルが多い中で、ホラー（恐怖）小説のみ人氣が衰えない状況を考えると、ラヴクラフトの主張は説得力を帯びてくる」⁴⁰と述べているように心の奥底の恐怖は不安な状況の現代において癒されるべきものの一つであ

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

りましょう。人間の無意識に迫るラヴクラフトの恐怖小説がいま見直されております。また鈴木俊隆老師も心を説いています。形は違ってもホエーランは両者に共通しているものを見つけていると思います。

最後になりましたが、亡くなったフィリップ・ホエーランと大学時代から終生友人であったゲイリー・スナイダー（存命で活躍中）という詩人がいます。ホエーランは太平洋戦争では海軍の兵隊でした。そして兵隊を務めた後、大学に入ったわけですので、七歳スナイダーより年上ですが、それでも、大学ではずっと同じで、亡くなるまで友達でありました。

そのホエーランの『全詩集』の序文でゲイリー・スナイダーは「フィリップ・ホエーランは詩、心の平静、鑑識眼のある聡明さを決して忘れることはなかった。そしてホエーランの詩のあり方は彼の教えの主なる部分であった」と書いています。ホエーランは仏教を学び、詩を書いたアメリカでは数少ない求道の人でありました。

御清聴を感謝します。

注

(1) 『日本経済新聞』二〇一六年九月九日。

(2) 石井清純監修、角田泰隆編『禅と林檎―ステイプ・ジョブズという生き方』（MPニヤオビパブリッシング、二〇一二）、一三三頁。

(3) 鈴木俊隆『禅マインド ビギナーズ・マインド』松永太郎訳（サンガ、二〇一四）、二五六―五七七頁。

(4) 原文は次の通りです。『*Zenshūji* / Here our days are nameless time all misnumbered / Right where Mr. Years wanted so much to be / Moving to the call of bell and semantron, / rites and ceremonies / Bright hard-colored tidiness Arthur Rackham world / (no soil or mulch or mud) / Everything boiled and laundered and dry-cleaned / And probably inhabited by that race of / scrubbed and polished men / who drive the dairy trucks of San Francisco / The arts ooze forth from fractures in planes of solid rock / Outer ambition and inwards tyranny / “Hurrah for Karamazov!” / Totally insane sprung loose from all moorings / I wander about, cup of coffee in hand, / Chating with students working in warm spring rain 25: III: 74 Philip Whalen, *Canoeing Up Cabarga Creek Buddhist Poems* (Parallax Press, 1996), p.

- 44.
- (5) 風呂本武敏「アイルランド精神―その二重性」『W. B. イェイツ論』増谷外世嗣編著（南雲堂、一九七八）、一九頁。
- (6) 同右、四二頁。
- (7) 羽矢謙一「イェイツとロレンス」増谷外世嗣編著、一一頁。
- (8) W. B. Yeats, *The Poems*. Edited and introduced by Daniel Albright (Everyman's library, 1992), p. 384.
- (9) 内藤史朗「彫像」にあてた禅の影響』『会報』第四号、一九六九・一二二〇）、一三頁。因みに内藤史朗「彫像」の試作過程における禅の影響』『大谷学報』第五〇巻第四号（一九七一・一七二七）参照。
- (10) 同右引用文中。因みにW. B. Yeats, *Last Poems Manuscript Materials*. Edited by James Pethica (Cornell University Press, 1997), pp. 203-235参照。
- (11) 東儀道子『雅楽の心性・精神性と理想的音空間』（北樹出版、二〇一六）、二六〇―六二頁。
- (12) 『佛教大事典』監修古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄（小学館、一九八八）、七三〇及び九二〇頁。
- (13) 因みにホエーランの終生の親友、ゲイリー・スナイダーは禅寺の生活についての詩の中で「鐘、木版の響き」(“bells, / wood block crack”) というように「木版の響き」

現代アメリカの文学作品と仏教（田中）

- (“wood block crack”) という表現を使っています。
- 『Buddha 英語 文化 田中泰賢選集③ギンズバーグとスナイダーの仏教』（あるむ、二〇一七）、一八九―一九三頁参照。
- (14) 内藤史朗「イェイツと東洋思想」増谷外世嗣編著、二〇七―二五九頁参照。
- (15) 鈴木俊隆『禅マインドヒギナース・マインド』、一〇九―一〇頁。五九頁。八二―八三頁。
- (16) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* (Macmillan and Co., Limited, 1935), p. 212. この書物は昭和六三年（一九八八）三月二十九日、ロンドン、セシルコート書店（John Adrian）にて購入していたが今回引用出来たことをありがたく思う。
- (17) 増谷外世嗣「仮面の変貌」増谷外世嗣編著、一四六頁。
- (18) 風呂本武敏『想い』を知られば知るほどに―工藤好美先生に教わって』（私家版、二〇〇八）、四一―四二頁。因みにアイルランドについての図書、『文学都市ダブリン』ゆかりの文学者たち』木村正俊編（春風社、二〇一七）が出版されています。十八名の研究者が「二〇一〇年にユネスコから「文学の都市」として指定されているアイルランドの都市ダブリンに目をすえ、古来この都市とゆかりの深かった文学者たちの足跡を追いながら、ダブリン、さらにはアイルランドの輝かしい文学伝統とその価値を解き明かそうとして」（木村正俊「序章」六頁）執筆しています。この書物からもアイ

現代アメリカの文学作品と仏教 (田中)

- ルランドについて学ぶことができました。
- (19) 平松洋監修『アーサー・ラッカムの世界 新装版』(KADOKAWA、二〇一九)、四一五頁。
- (20) 同右、六頁。
- (21) 同右、九頁。
- (22) 高橋吉文「一九世紀西洋視覚とジャポニスム―挿絵の世界は切られてなんぼ―」『カラー図説グリンムへの扉』大野寿子編(勉誠出版、二〇一五)、一六五―一六六頁。
- (23) 同右、一六六―一六七頁。
- (24) 村上春樹「翻訳者として、小説家として―訳者あとがき」スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』村上春樹訳(中央公論社、二〇一八)、三三三頁。
- (25) ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』四「全四冊」米川正夫訳(岩波書店、二〇〇三)、四〇六頁。
- (26) 同右、四〇三頁。
- (27) 同右、四〇六頁。
- (28) 小林銀河「日本人の宗教意識とドストエフスキー研究」『スラブ・ユーラシア学の構築』研究報告集』10、北海道大学スラブ研究センター、(二〇〇五：一八―三二)、三〇頁。
- (29) 原文は次の通りです。*Discriminations / Earliest morning hot moonlight / A catastrophe, the garden too theatrical / Feels wild, unearthly / H. P. Lovcraft could use his favorite adjective: / "Eldritch" / The "shooting-star"*

- Flowers that Mama used to call "bird-bills" / Bloom around the Hogback graveyard / Suzuki Roshi's great seamless monument / Wild cyclamen, actually, as in the *Palatine Anthology* / I go home to mend my *rakusu* with golden thread. *Tassqara*, 24: II: 78 Philip Whalen, *Canoing Up Cabarga Creek Buddhist Poems*, p. 47.
- (30) ヒューストン・スミス「序文」鈴木俊隆『禅マインド ビギナーズ・マインド』、一二頁。
- (31) 古木宏明「破滅への欲望―H・P・ラヴクラフト作品が求められる理由の考察」『龍谷大学大学院研究紀要：社会学・社会福祉学』第一六巻(二〇〇九：一一―一八)、四頁。
- (32) 同右、五頁。
- (33) 紀田順一郎『幻想怪奇譚の世界』(松籟社、二〇一一)、一八七頁。
- (34) H・P・ラヴクラフト『ネクロノミコンの物語』森瀬繚訳(星海社、二〇一八)、一二頁。
- (35) 金井公平「西洋文学における超自然―H・P・ラヴクラフトとゴシック小説」『明治大学人文科学研究所紀要』第四四冊 一九九九：九三―一〇五参照。
- (36) 上田秋成『改訂雨月物語』鶴月洋訳注(KADOKAWA、二〇一八)、二六九―七〇頁。
- (37) 後藤明生『現代語訳日本の古典19雨月物語・春雨物語』(学研、一九八〇) 一一三頁。

- (38) 同右、一一四―一五頁。
- (39) 上田秋成『改訂雨月物語』 鶴月洋訳注、三―三頁。
- (40) 金井公平、同右、九五頁。
- (41) Gary Snyder, "Foreword," *The Collected Poems of Philip Whalen*, edited by Michael Rothenberg, Wesleyan University Press, 2007, p. xxix.